

論文要旨

人文科学研究科 日本語教育学教室

譚 笑

学習番号：17965104

現在、中国の大学における日本語教育は口頭運用能力の育成に重点を置いていない。豊富な語彙量、高度な文法知識を持っていたとしても、簡単な日常会話も流暢にできず、口頭運用能力が低い学習者が多い。このような学習者に、より自由度の高い発話練習環境を提供するために、時間と空間に制限されないアプリケーション WeChat を新しい練習ツールとして利用し、話者の間に交替反応時間の長い発話環境で発話練習の実態を明らかにすることが求められている。

本研究では、中国の大学に在籍する日本語学習者により自由度の高い発話練習環境の作成について提案することを主な目的としている。中国で頻繁に使用されているアプリケーション WeChat の音声メッセージ機能を利用した話者の間にある交替反応時間の長い発話環境での発話活動の実態を明らかにし、アプリケーション WeChat が持つ新しい練習ツールとしての可能性を探り、WeChat 発話環境の作成に関して提案した。

予備調査で研究背景を再考察してから、WeChat 発話環境を用いて日本語学習者を対象とし、実践調査を二段階に分けて行った。その後、総合的に考察するために、日本語学習者にフォローアップインタビューを実施することによって、WeChat 発話環境での発話活動に対する主観的な評価・感想を把握した。また、WeChat 発話環境の特徴を考察するために、中国語母語話者の発話データを収集し、日本語学習者のデータと比較しながら、再考察を行った。

予備調査の段階で、中国雲南省の大学に在籍する日本語学科の学習者 3 年生 61 名、4 年生 32 名を調査対象者として、日本語発話練習の状況、話す意欲・能力に対する自己評価、WeChat についての三つの項目を中心に、16 問を設定した質問紙で、アンケート調査を行った。その結果、日本語発話練習の状況に関しては、中国の内陸に位置する大学における日本語教育は日本語口頭運用能力の育成に重点を置いていないことが明らかになった。学習者の話す意欲を調べることによって、学習者は 3、4 年生になると、日本語で話す意欲が下がっていく傾向があると考えられる。また、即興性の高い「話す」、「聞く」ことに弱いという中国人日本語学習者の弱点が見られ、学習者は「中上級になっているのに、

間違えたら恥ずかしい」という意識が強く、間違いに対する不安が多いことが推測できる。そして、相手と対面する伝統的な発話練習方法より、WeChat のような簡単に操作でき、普段の生活にもよく活用されている携帯アプリケーションの方が発話練習手法の一つとして、多くの学習者に期待されていることも分かった。

第一段階調査では、中国の大学で在籍する 3、4 年生の日本語学習者を研究対象者として、中国に頻繁に使用されているアプリケーション WeChat の音声メッセージ機能を利用した交替反応時間の長い発話環境での発話活動の実態を明らかにし、アプリケーション WeChat が新しい練習ツールとして利用できる可能性を示した。相互作用的发話機能の出現率を見ることを通して、WeChat 発話環境の実態をやや把握することができてきた。対面会話の結果に比べ、WeChat 発話環境では、話者間の交替反応時間が長いため、「支持」の出現率が高くなり、一つのまとまった発話を産出することがよく見られた。また、学習者の産出するフィラーなどの出現変化を考察することによって、WeChat 発話環境は、学習者にとって間違いに対する不安がある程度減少し、気楽に話せる発話環境だと考えられる。しかし、全体的に見れば、相互作用的发話機能の増減変化が非常に不安定であることや分析データが少ないことなどの問題点が残されているため、学習者の選定及び組み合わせなどにも工夫し、調査協力者の人数も増やし、更に調査データを取る必要がある。

第二段階調査では、第一段階調査の調査結果に基づき、調査期間や調査対象者の組み合わせの調整を通し、実践調査を行った。第一段階調査に比べ、調査対象者を 18 名に増やした。調査対象者を 3 人グループと 6 人グループに分け、合計 4 組のデータを取り、分析を行った。自由発話における各相互作用的发話機能の出現率や相互作用的发話機能の出現変化を見ることを通して、WeChat を活用した交替反応時間の長い環境での発話活動の実態を明らかにした。また、テーマ発表におけるフィラー・繰り返し・言い直しの出現の変化を観察することによって、発表形式の変化から、学習者の心理的な変化を考察した。

その結果は第一段階調査の結果に一致するところが多い。「支持」や「発展」の出現率が高いことから、第一段階調査で述べられた「WeChat 環境は考える時間が充実しており、中断されずに話す内容を増やせ、まとまって発話することが可能だ」ということを更に検証できた。また、フィラーなどの出現変化に関して、フィラーなどの出現変化に増加する傾向が見られた学習者が 20 名中 17 名もいるため、WeChat 発話環境は学習者の間違いに対する不安が減少することに役立つことも明らかになった。

第 8 章で、WeChat 発話環境で発話活動を行っていく継続性や発話活動の活発さに影響

を与える要因に関して考察した。まず、WeChat 発話環境の継続性について、第 2 段階調査は、A・C グループの結果から見れば、相互作用発話機能の出現が安定的に増減する傾向が見られたため、発話活動の頻度を調整することを通して、第 1 段階調査より継続性が見られた。そして、継続性が見られない B・D グループに対して考察すると、学習者間の親密度に影響されており、クラスメートのようなある程度親しく、普段でも会える相手だからこそ、話す内容をある程度配慮しなければならないと考えられ、自己開示して話していくのは少々困難である。つまり、学習者間の親密度の低いグループであれば、WeChat 発話環境を活用して発話活動を活発に行っていくのは可能である。グループ人数の設定と話題設定が発話活動の活発さに与える影響はそれほど見られないが、少人数グループの方が「黙ってはいけない」という潜在意識に影響されるため、活発に自由発話に参加すると推測できる。また、話題の難易度が急変することを避けて設定すれば、発話活動が徐々に活発になっていくことが可能だと考えられる。

第 9 章では、WeChat 発話環境の特徴を再考察するために、WeChat 発話環境での中国語母語話者の発話データを取り、相互作用発話機能の出現について分析を行った。その結果、日本語学習者のデータに限らず、中国語母語話者場合でも、一方的な発話である「支持」「発展」の出現率が高いため、WeChat 発話環境は「まとめて話すこと」が引き出されやすい発話環境であることが明らかになった。

第 10 章では、フォローアップインタビューの内容を詳細に記述し、学習者の WeChat 発話環境での発話活動に対する評価をまとめ、WeChat 発話環境での発話活動の利点や欠点などについて考察した。まずは、学習者の日本語口頭運用能力に対する自己評価から、約半数の学習者が発話活動に参加することを通して、日本語の口頭運用能力がレベルアップしたと実感していることが分かった。また、WeChat 発話環境での発話活動に対する評価に関して、「緊張しない・プレッシャーない」と評価した学習者が多いため、WeChat 発話環境は対面ではなく、間違っても削除できるという利点があり、学習者の心理的な不安の減少に役立つと考えられる。

終論である第 11 章では、各論によって得られたものを総括し、日本語教育への示唆、今後の課題を検討した。